

巻頭言

働き・学び・育ちが交差する、 人間性の深まりと広がり

古村 伸宏 (日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会理事長
/協同総研常任理事)

AIやIoTをはじめとする新しいテクノロジーが、社会のあり方を変えはじめている。ドイツの「インダストリー4.0」が契機となり、各国が様々な新しいテクノロジーを活用した戦略コンセプトを打ち出し、日本においても新たな未来社会のコンセプトとして「ソサエティ5.0」が打ち出されている。これら産業的・社会的な近未来のコンセプトは、国家プロジェクトとして急速に普及しているが、総じてグローバルリズムのあくなき追求の流れの中で捉えられている。しかし、「SDGs」に象徴される社会全体の「持続可能性」というキーワードも波及している。

社会の進化・発展は、人間が生き延びる術としての「産業」を必然としてきた。一方でそれは、人間の経験的で知的な学びの集積によって導き出された「知」の結晶でもある。それは、単に生き延びるだけではなく、「よりよく生きる」ために、社会を進化・発展させるといった欲求があったはずである。ところが、「よりよく生きる」ための学びと知の結晶は、いつしか「儲ける」「独占する」「支配する」という

欲望が支配するようになった。テクノロジーの発展は、このまま強欲を加速させるのか、欲望に制御と秩序を与えるものとなるのか、人類史の分水嶺に今があるように思う。

1980年のICAモスクワ大会に出された報告「西暦2000年の協同組合」。我々のあり方を大きく左右したこのレポートは、すでに40年近く経った今日の「狂気の時代」を警告していた。人間が己の欲望にのみ従って生きるとすれば、それは社会を破壊していく事につながる。分断と対立の関係が人生を覆い、欲望が強欲へと先鋭化することによる、人間性=共に生きる術を失うことだ。人間が人間性を否定する事態の進行こそ「狂気」といえる。

一昨年の文科省が示した新しい学習指導要領には、「主体的で対話的で深い学び」というコンセプトがある。詳細な分析と議論は一旦横に置くとして、これまでの学びを転換し、これからの学びを創造するという意味において、先述の「学びの向かう先」が何なのか、ということに影響を及ぼすコン

セプトとを感じる。すなわち、このコンセプトは「どう学ぶのか」というテーマとして捉えるに留まらず、「何のために学ぶのか」という、学びの先・学びの周辺・そして学びの根源を捉えるというテーマでもある。折しも今、オルタナティブな教育や新しい学校づくりが活況を呈している。多様なステークホルダーが関わるプロジェクト「未来教育会議」が発表している、「人一生の育ち（通称ひばり）レポート」や「2030年の未来の社会・教育シナリオ」(<https://miraikk.jp/cat-01/3416>)もまた、新学習指導要領のコンセプトと重なる。一方で一昨年施行された「教育機会確保法」は、多様な学びの場の必要性を一步前に進め、フリースクールや夜間中学校など、学びの多様化と学ぶ権利を保障する多様な学びの場づくりを加速させていくだろう。

そして今、法制化が間近となった「協同労働」の特徴は、働く一人ひとりの「主体性」であり、その主体性を育む豊かな「協同の関係性」によって、底深い意味を持った「よい仕事」を創造し、多様性を認め合う持続可能な地域づくりに効果を発揮することである。「協同労働」の生命線は「話し合い（対話）」であり、「生命の尊厳」を真ん中に据えて、仕事の意味と価値を問い続けることである。そして、労働を閉ざされた従属から解き放ち、学ぶこと・

くらすこと・生きることと深く交わり融合する営みへと発展させていく可能性を秘めている。昨年亡くなられた太田堯さんは、協同労働の挑戦を「未来的価値の創造」と評し、エールを送り続けて頂いた。また「命の特徴」を、①一人ひとり「違う」、②様々な「関わる」、③折り合いの中で「変わる」と言われ、生命は自ら変わる「根源的自発性」に基づく「代謝の持続的変化」であり、学習過程であり、学習効果であると言われていた。労働の営みも正に、職場や地域において、「違いを認め合い」「関わりの中で」「変化・創造」していくものである。

画一的で従属的な位置に置かれた「学び」と「働き」を転換することは一つの事であり、一体的である。そしてその総和が「人間として育つ」ということであり、一人ひとりの「主権」を尊重し合う「共存」という価値観を育てるだろう。生まれながらに人間は依存から始まり、多様な相互支援の関係の中でこそ生き続けられる。人間の自立とは、こうした様々な相互支援関係が結ばれ、それぞれの個性を活かし合うこと。その力（術）を獲得することが学びであり、働くということだとしたら、欲望にまみれた社会を脱するヒントがそこにある。

こうした視点から、協同労働の法制

化を捉え、協同労働の営み・事業の意
味や評価を考えていきたい。

以下は、今年度立ち上がった「労協
連合会・SDGs推進本部『学びと育ち

多様化探究プロジェクト』」出発にあ
たって掲げた方針であり、今年度から
取り組みは始めている。

「協同労働×SDGs」推進のための研究・探求・実験

学びと育ち多様化探究プロジェクト

特に、人の「学びと育ち」に関わる課題は、狭い「教育」いう位置づけから
抜け出し、「労働」「福祉」「環境」「文化」と融合していくような実践と政策が
求められているのではないか。そして、人の一生を視野に入れた「学び・働く・
育つ」を融合する実践の模索が、各所で始まろうとしている。

協同労働運動は、その本質に「働く」というテーマを据え、営む様々な事業
を通して、組合員に留まらない、様々な人々の「学び・働く・育つ」と向き合
う実践を進めている。こうした経験を土台とし、これからの持続可能性と多様
性に満ちた、生命に中心価値を置いた「学び・育ち・働く」の融合的な実践を
切り拓く構想を描くために、「学びと育ちの多様化」をテーマに、本プロジェク
トは本質的・哲学的探究に取り組む。

そしてこのプロジェクトは、1年間の基本的探究活動を展開し、具体的な「学
び・働く・育つ」統合的な場づくりの開発を構想するプロジェクトとして発展
させていく。この構想は、従来の「学校づくり」を更に統合的・革新的に追求
するものであり、協同労働の現場の発展の方向・可能性をも、この探求の成果
によって切り拓いていく。